

恵みには応答が伴なう

「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」
(コリント人への手紙第二章8節)

自由には責任が伴なう。一般的によく言われる言葉ですが、福音の世界では、むしろ、こうではないでしょうか。「恵みには応答が伴なう」。ところで、ヒットラー暗殺計画に関わったかどで逮捕され、獄死した神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーは生前、「安価な恵みと高価な恵み」という主題と取り組みました。

安価な恵みとは、神の絶大な恵みが注がれているにも関わらず、それらをただ受けるだけで、何ら応答していない状態のことを意味します。つまり、応答しない私たちによって、神の恵みの価値は低くされるということでしょう。それに対して、高価な恵みとは、神の恵みにしっかりと応答している状態のことであり、その恵みの価値はその恵みに対する応答によってこそ、高められるというのです。

映画「十戒」と言えば、あの紅海が割れる場面がまさに圧巻ですが、特撮技術やCG等がない時代は、紅海が割れる場面を、それを見て驚いている民の驚きの表情だけで表現したそうです。イスラエルの民の応答がその事実を如実に物語る訳です。同様に、主イエスの復活の事実は、それを目の当たりにした弟子たちの変化という応答が力強く証しているのではないのでしょうか。

神の驚くべき恵み(Amazing Grace)の高価さは、ジョン・ニュートン作詞の讃美歌だけではなく、私たちキリスト者の一人一人の“応答”にかかっているのです！

“打てば響く”信仰

「この時代を何にたとえたらよいでしょう。市場にすわっている子どもたちのようです。彼らは、ほかの子どもたちに呼びかけて、こう言うのです。『笛を吹いてやっても、君たちは踊らなかった。串の歌を歌ってやっても、悲しまなかった。』」
(マタイの福音書 11 章 16～17 節)

先日、ふとしたことからちょっとしたアイデアを思い付き、サララップで知られる旭化成にメールを送りました。被災地では、断水時、お皿にラップを敷いて使用し、お皿を洗わなくても済むようにしたのです。茨城キリスト教大学の“チャペル・カレー”の時も、実はそうしているのです。そこで、お皿に敷くため専用の、やや厚手で破れにくいラップを提案した次第です。もちろん、名称も提案させていただきました。名付けて「サラアラワンラップ(皿洗わんラップ)！」。そして、なんと、メール送信の一時間後には、アイデア提供への感謝の電話があったのです。

「打てば響く」とは、こういうことではないでしょうか。ところで、「神のものは神に」とありますように、私たちは神に応答する存在として創造されました。そんな私たちの信仰は、はたして「打てば響く」ものになっているのでしょうか。ともすると、上掲のみことばのように「笛吹けども踊らず」、応答どころか、全く反応がない、ということになってはいないでしょうか。

願わくば、元漁師の弟子たちが網を捨てて、主イエスの召しに即座に従っていったように、私たちも神の愛に答え、さらには、他者の必要に応える者になりたいと思います。できれば、あの旭化成お客様センターの如く「打てば響く」ように・・・!?

究極の解放感

「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

(ヨハネの福音書3章32節)

皆さんは、どういう時に解放感(開放感)を感じますか?つい先日、センター試験が終わりましたが、学生でしたら試験の後、社会人でしたら仕事が終わった後のアフター5でしょうか。子供だったら放課後、主婦だったら家事を終えてお風呂に入っている時かもしれません。ちなみに、私は説教準備が完了した時に、大いなる解放感に浸ることができるのです。

ところで、聖書はある意味、“解放”の書と言えるのではないのでしょうか。旧約時代であれば、まずは「出エジプト」。これはイスラエルの民がエジプトでの奴隷生活から解放された出来事です。また、その後の「バビロン捕囚からの帰還」も、バビロンに捕囚となったユダヤ人が解放され、祖国へ返ってくるという解放劇です。

新約聖書の福音書には、主イエス・キリストによる多くの悪霊追放や病気治癒の記事がありますが、これらは当時の人々がまさに悪霊の束縛から解放され、病気の縄目から解放された出来事なのではないのでしょうか。

そして、極め付きは、罪の束縛からの解放です。主イエス・キリストは、まさに、そのためにこそ、来られたのではないのでしょうか。確かに、主イエスは上述したように多くの悪霊追放や病気治癒をされていますが、実は、その目的は「病気=罪の結果」と考えられていた古代において、彼らをその罪の呵責の束縛から解放するためにほかならなかつたです。罪の束縛からの解放。これこそ、究極の解放感です!

信仰の襷を受け継ぐ

「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまとわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競争を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」

(ヘブル人への手紙 12 章 1 節)

今年の箱根駅伝でも、いくつかの見せ場がありました。その一つ、神奈川大学の奇跡の襷リレーを覚えている方、少なくないのではないのでしょうか。実は、微妙に繰り上げスタート時刻を超えているとの見方もあるようですが、規則的には審判員の判断が優先されるようです。いずれにしましても、痙攣した足を引きずりながらも必死に襷を繋ごうとする選手の姿には、大いなる感動を覚えました。

私たち御茶の水キリストの教会におきましても、まさに、そんな信仰の襷が途切れることなく、着実に受け継がれてきたのではないのでしょうか。ところで、昨年、ある兄弟の告別式の司式をした関係で、そのご遺族の方々とお話をする機会がありました。その中で、御茶の水キリストの教会がこの地に教会堂を建てることに大いに貢献した一人の日本人クリスチャンがいたことを知りました。

有名、無名を問わず、御茶の水キリストの教会は、神の恵みのうちに、本当に多くの信仰の先駆者たちによって、その襷を繋いできていただいたのだということを改めて実感いたします。決して宣教師だけではありません。また、兄弟たちだけでもありません。“御茶の水の二人のセツ” こと、赤松せつ姉や平塚せつ姉など、姉妹たちもいました。彼らがいて、私たちがいて、そして、子供たちがいるのです！

未体験の苦しみに無理解にならないために

「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」

(ローマ人への手紙 12 章 15 節)

いよいよ明日(1/9)は、チルドレンズ・ホーム招待(以下、ホーム招待)です。ある兄弟の記憶と計算に抛れば、今回でなんと節目の 50 回目だそうです。このホーム招待は、御茶の水キリストの教会が代々受け継いできた教会行事の一つであり、「ホーム招待が終わらないと正月が来ない」とまで言われることもあるのです。一方で、若い世代の中には、そのやり方と意義に疑問を持つ姉妹もおられます。確かに「ローマは一日にして成らず」。わずか一日で一体、何ができるのでしょうか。と同時に、チャンスが一日なら、その中でできることをしていきたいとも思います。

ところで、チルドレンズ・ホームにいるおともだち一人一人に思いを向けてみましょう。彼らは毎日、どのような思いで生活しているのでしょうか。様々な理由があると思われませんが、いずれにしても、親と一緒に生活できない環境にあることは事実です。私たちは、そんな彼らの環境をどれほど理解しているのでしょうか。もし、私がそのような環境に置かれたならば・・・想像するだけで涙が込み上げてきます。でも、その共感・共苦の思いも、ほんの一部に過ぎないでしょう。

人は、未体験の苦しみに対しては、どうしても無理解になってしまうものです。ゆえに、私たちは愛と想像力を発揮して、そのような方々の苦しみを共に苦しむ必要があるのではないのでしょうか。それが良きサマリヤ人や放蕩息子の父親がした「かわいそうに思」う([ギ]スプリングニゾマイ=内臓を揺るがす)[ルカ 10:33/15:20]ということなのです。

“守る人生” から “ささげる人生” へ

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」

(ローマ人への手紙 12 章 1 節)

主にあって、新年明けまして、おめでとうございます！・・・「一年の計は元旦にあり」。今年、2012 年は、元旦が主の日ということで、礼拝をささげることからのスタートとなりました。これをきっかけに、ぜひ、今年こそは、自分自身を主に“ささげる”一年でありたいと思います。

ところで、昨今の世界的な人口増加の問題(世界人口 70 億突破)や日本での年金問題(受給時期や受給額)などもありまして、人生の先行きに不安を感じている方も少なくないのではないのでしょうか。確かに、人生、「守り」に入ってしまうと、悩みの種はいくらでもあります。しかしながら、もし、私たちの人生を「守る」という視点ではなく、むしろ「ささげる」という観点で見直してみたらどうでしょうか？

私たちの命も人生も、これらは全て、神からの“賜物”なのです。賜物はむしろ、「宝の持ち腐れ」にならないためにも「使う」ことが求められているのではないのでしょうか。

一度限りの人生。主が身をささげて下さったことを通して私たちに確約されている天の御国での永遠の安らぎを望み見つつ、主の愛と恵みに応えて、私たちの人生を精一杯主におささげしようではありませんか。目先の安心よりも主への献身を！